



京都・東九条CANフォーラム

ニュースレター第7号

2011年8月19日 No.007

「地域・多文化交流ネットワークサロン」に期待する

この号の内容

1. 「地域多文化交流ネットワークサロン」に期待する
2. 第42回「人権交流京都市研究集会」報告
3. 外国人高齢者障害者生活支援研究会「東九条地域高齢者調査」中間報告会
4. CANフォーラム総会と討論集会のお知らせ

完成した東岩本市営住宅1階部分の写真

希望の家・地域集会場・地域多文化交流ネットワークサロン(京都市施設)が入る。



京都・東九条 CAN フォーラム

〒601-8013

京都市南区東九条南河原町3

075-204-7900

<http://higashikujoforum.jimdo.com/>

E-mail/higashikujoforum@gmail.com

2011年7月、北河原市営住宅の老朽化による建替え事業として行われた京都市東岩本市営住宅が完成し、その1階部分に旧生活館に代わるものとして「地域・多文化交流ネットワークサロン」が開設され、社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会(希望の家の運営主体)が指定管理者として事業委託を受けました。

この施設の開設目的は、東九条地域の地域福祉を考えると避けて通ることのできない多文化共生の課題を真正面から捉え取り組もうとするものとして高く評価するとともに、大きな期待を寄せています。

その具体的な事業内容は次のようになっています。(ア)情報の収集・提供・発信、①東九条をはじめとして地域交流と多文化共生を促進する活動を行う各NPOや各種団体に関する情報(活動内容・イベント、ボランティアの募集等)を収集し、広報誌の発行やホームページ上で紹介・提供する。②東九条をはじめとする多文化共生に関する資料等を収集し、可能な限りデータベース化するとともに、提供する。(イ)活動の担い手の養成、研修の実施およびコーディネート、①地域交流と多文化共生を目的とした活動への参加意欲のある市民のための講座・研修会を開催することにより市民意識を啓発するとともに、活動の担い手を養成する。②活動に関心を持つ市民や支援を求める市民に対し、NPOや団体等へのつなぎ(ボランティア募集等の情報を提供するとともに、各団体等の担当者との調整を含む)を行う。(ウ)活動支援、①NPOや団体等の交流・活動の場の提供として、多目的コーナー(数人でのミーティング、グループ間の情報交換等自由に利用)の利用提供を行う。②小さなグループ等に対し活動のアドバイスを行うことや、主催する事業(イベント)等への協力・参加を呼び掛ける等により、活動の発展やグループ間の交流を促進する。(エ)調査・研究、①大学等と連携し、地域住民が参加する事業を実施し、その成果を公開するなどにより地域の課題の共有化や地域活動の活性化を推進する。②地域交流と多文化共生に関する京都市内外の既存の調査の把握・分析を行い、その成果を講座等の主催事業に反映させる。(オ)交流・連携の促進のための事業の実施、①NPOや団体、関連施設、企業、大学などとの交流・連携のためのイベントを開催する。(カ)ネットワークの促進、①NPOや団体、関連施設等との日常的なネットワーク体制を確立できるよう連絡会議等を開催するとともに、蓄積された情報をもとに多文化共生の理念を踏まえた地域福祉促進の等の新たなモデルケースの開拓や発信を行う。

これらの多くの事業を行ってゆくためには、地域はもちろんのこと地域外からも多くの団体・個人の寄与と、継続した活動実績を積んでゆく時間が必要になります。CANフォーラムは「地域・多文化交流ネットワークサロン」を積極的に活用し、事業の活性化に寄与したいと考えています。

- 個人会員 1口 1,000円
一口1,000円で何口でも結構です
- 団体会員 1口 5,000円
一口5,000円で何口でも結構です

- 賛助会員 いくらでも結構です
活動に使わせていただきます
- 特別会員 会費負担なし
どんどん活動に参加してください

**ご協力を頂いたみなさま、引き続き
会費納入にご協力ください。
この活動は皆様の支援に支えら
れ行われています。**

振り込口座: ゆうちょ銀行 00910-7-216594 口座名義: キョウト・ヒガシクジョウキャンフォーラム

第42回人権交流京都市研究集会 第2分科会「共生社会とまちづくり」報告



コーディネーターの大阪人間科学
大学 石川久仁子准教授

一人ひとりの経験や思いに根付いた多様な実践が更に生まれること、そして今後、既存策に加えて多様な市民の力を重層的に支援する支援環境が整えられること



朴 実
京都・東九条 CAN フォーラム代表

九条マダンに関わる中で見えてきたものは、在日コリアンを始めとする外国人と日本人との「多文化共生」であり「まちづくり」の視点



左から
希望の家保育園保育士 金光敏
京都市立小学校教員 李大佑
京都「モア」ネットワーク 金周萬
京都市国際化推進室室長 糟谷範子

2011年2月19日(土)第42回「人権交流京都市研究集会」が大谷大学において開催されました。今年のテーマは「めざそう！共生・協働の社会創造」で、全体集会で「TOKYO アイヌ」が上映され、午後から5つの分科会に分かれて討議が行われました。京都東九条 CAN フォーラムは第2分科会－共生社会とまちづくり－の主管を務めました。

今年の第2分科会は「多文化共生のまちづくりをめざして」をテーマとし、京都で最も在日外国人が住む東九条での多文化共生の活動を焦点に据えて行われました。冒頭コーディネーターを務める大阪人間科学大学准教授石川久仁子さんより分科会の討議の柱として、そもそも「多文化共生のまちづくり」とは何だろう、地域に根付いているのだろうか、それを探っていききたいとの提起がされました。

基調報告は前東九条マダン実行委員会代表で現在京都・東九条CANフォーラム代表の朴実さんが行った。朴実さんが東九条マダンに関わる中で見えてきたものは、在日コリアンを始めとする外国人と日本人との「多文化共生」であり「まちづくり」の視点であった。東九条を「多文化共生のまちづくり」のモデルとすべく、従来の住環境改善中心のまちづくりからの脱却、学校統廃合に伴う民族教育の問題、「多文化共生活動センター(仮称)」作りなどを推し進める広範な提起がされました。

次に東九条で多文化共生保育を実践する希望の家保育園保育士金光敏さんの報告があった。子供たちが育つ東九条地域では国籍や民族が違って当たり前、その違いを大切にすることこそ多文化共生保育の基本との報告がなされました。また地域住民との軋轢があっても、相互理解の為に粘り強く関わってきた実践が紹介されました。

京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク・モア共同代表金周萬さんの報告では、在日外国人高齢者・障がい者の無年金問題に取り組む中から見えてきた差別に対し生活支援の視点が提起され、現在展開中の生活実態調査に繋がっている事が紹介されました。

京都市小学校教員李大佑さんの報告は、日々の教育実践の中で「君が代」の問題、保護者との関わり等曖昧にせねば難しい自分がある事、パジチョグリを着たり、韓国語を使用する事にも違和感を持ちながらも、自分の中に多文化が存在していること。多文化共生とは相互理解の上に成り立つもので、そのためには徹底した「人との関わり」を意識し、子どもたちと常に関わり続ける事を大切にしながら多文化共生に繋げていこうとする実践が報告されました。

最後に京都市国際課推進室室長糟谷範子さんからポス্টン留学で感じた多文化共生や異文化理解の意味、街の活性化の現実の報告、又「京都市国際化推進プラン」は215項目中209項目が着手されている等報告され、地域での多文化共生をどう進めるのか、双方向の関わりをどう作るのか等貴重な視点が提起されました。

各報告の後討議が行われ、人的資源や広範なネットワークが存在している東九条でのまちづくりをどう豊にしていくのか、人ひとりの経験や思いに根付いた多様な実践が更に生まれること、そして今後、既存策に加えて多様な市民の力を重層的に支援する支援環境が整えられることなどが討議されました。

外国人高齢者障害者生活支援研究会トークセッション 「東九条高齢者調査が問いかけるもの」開催

2011年8月6日京都キャンパスプラザにおいて、京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク「モア」の主催で、トークセッション「東九条高齢者調査が問いかけるもの」が開催されました。

この調査は京都モアネットと大学の研究者が「外国人高齢者障害者生活支援研究会」を構成し、文部科学省の研究費補助を得て行っているもので、本年2-3月に東九条地区と小栗栖地区に住む高齢者(70歳以上)を対象に調査を行い、5月に東九条地区コリアン高齢者を対象に特定して行った調査の集計結果の中間発表としての性格をもつものです。

先ず、京都「モア」ネットの朴錫勇共同代表は主催者挨拶でこれまでの活動を振り返り、これまでは相談窓口やコリアンコミュニティを通じての支援活動を行ってきたが、今回の調査を通じて地域の自治会・民生児童委員・老人福祉委員・福祉機関・NGO・大学関係者との連携協力に取り組む可能性が見えてきた。インクルーシブ(排除せず包摂すること)な地域社会の実現という理念を共有することで、地域コミュニティとの関係が希薄で、孤立傾向にある外国人高齢者にも地域ぐるみで支援を行っていくことが可能になる。外国人福祉委員の役割が地域福祉ネットワークにしっかりと位置付けられるように、東九条をモデルにして京都市全域に広げてゆけるような活動をしてゆきたいと述べられました。

続いて、立命館大学小澤亘教授と大阪人間科学大学石川久仁子准教授のお二人より調査の概要と現時点までの分析による特徴的な傾向についての報告がありました。報告は、先ずこの調査がこの種のアンケート調査としては非常に高い回答率を得ることができたことに触れ、自治会・地域福祉関係者・NGO・民族団体・大学関係者などが従来なかった調査協力体制で取り組めたことが良い結果を生んでおり、このような連携構築自体が研究活動の目的にあると述べられました。次に、文化的背景による比較、数量データの多変量解析、地域の分析、調査員コメントの質的分析などが様々な分析方法に基づいて報告され、この調査データの分析が豊富な知見をもたらすことが説明されました。たとえば、高齢者の幸福感を訪ねる質問の回答を多変量解析にかけると、暮らし向きや健康状態などの当たり前と思われる普遍的な条件のほかに、老人福祉委員を知っているかどうかの幸福度に関連していることが明らかになり、ボランティアなサポート活動が高齢者の幸福感に大きな要素になっている。外国人高齢者は地域での関係からか老人福祉委員を知っている割合が少なく、モアネットの外国人福祉委員の活躍と地域の福祉関係者との連携の重要性が見えてくるなど、興味深い分析結果が多数報告されました。(このような報告会は今後も開かれますので、興味のある方は次の機会を逃さずにご参加ください。この調査研究結果の報告書は2013年春ごろには出版される予定です。)

報告の後、調査活動に参加した調査員のお二人から感想が述べられました。京都モアネットの事務局にいる朴淳湖さんは、外国人福祉委員が民生児童委員や老人福祉委員と肩を並べて調査の臨んだことは画期的で意義深いことであった。外国人福祉委員制度の認知度を(→P4に続く)



主催者挨拶をする京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク「モア」の朴錫勇共同代表



調査結果概要について報告する
小澤亘立命館大学教授

各調査回答者の文化的背景

	日本人	コリアン	中国帰国者等	合計
陶化地区	134	45	0	179
山王地区	194	31	0	225
小栗栖地区	99	1	20	120
東九条コリアン		64		64
合計	427	141	20	588
%	72.6	24.0	3.4	

各調査回収率

	抽出対象	回収	%
陶化地区	300	179	59.7
山王地区	300	225	75.0
小栗栖地区	162	120	74.1
東九条コリアン	100	64	64.0



事務局からのお知らせ

- CAN フォーラム総会と討論集会

「京都の多文化共生を進めるために」

日時: 2011年9月11日(日)

午後1時30分～総会

午後2時～ 討論集会

場所: 地域多文化交流ネットワークサロン

京都市南区東九条東岩本町

東岩本市営住宅1階

(希望の家児童館と同じ建物内)

《討論集会内容》

発題1

仮称「東九条多文化共生推進センター」

実現への思いと呼びかけ

朴 実(京都東九条 CAN フォーラム代表)

発題2

京都における多文化共生をすすめるために
思うこと

仲尾 宏(元京都市外国籍市民懇話会

座長・社団法人大阪国際理解教育研究センター理事長)

発題の後、参加者からの発言で議論を深め、今後の有効な活動を探ってゆきます。



(→P3の続き)

高めてゆく必要、外国人福祉委員の養成とレベルアップを図ってゆく活動が求められていると強く感じられた。また、調査の過程で支援を必要とする方々の発見が多くあり、調査だけで終わるのでなく、今後の日常的な支援活動につなげてゆくことが重要だと感じた。地域の日本人高齢者とコリアンの相違点と共通点、福祉についての考え方などについて学ぶことが多く、個人的にも有意義であった等の感想を述べられました。

NPO 法人東九条まちづくりサポートセンター事務局の村木美都子さんは、老人福祉委員・民生児童委員が地域の高齢者のことをよくご存じて、先導やつなぎをして頂いたおかげでアンケート調査を非常にスムーズにすすめることができ、草の根的なネットワークが非常に大切だということを実感できた。個人的な印象としては、独居であるということとは関係なく、学ぶこともできず、ひたすら労働と苦勞ばかりしてきた在日の方の「さびしさ」「満たされない思い」というものを感じた。それは自分の思いや愚痴や本音の部分を知ってくれる人がいない、あるいは出せていない、ずっと抱え込んだままではないかと感じる。その思いを外に向けて吐き出してしまえる、そして受け止めてくれる人がいることがとても大事なことでないか。

調査対象者からは「普段は自分のことはほとんど話さないけど、今日は話を聞いてもらって気分がすっきりした」とか「自分は年金も無いし、子どもたちには世話になってるし、これ以上迷惑はかけられへん。ヘルパーさんが来てくれる時ぐらいが楽しみ、毎日天井ばかり見ているし、今日は話を聞いてくれてありがとう」などの言葉を聞くことができた。日本人の高齢者も同様に近隣に挨拶を交わす程度の関係があっても、自分の方を向いてくれると感じる関係は案外に少ないのかなと感じた。介護保険や様々なサービスが入ってぎりぎりまで在宅で過ごせるようになったが、それだけでは満たされていない心の問題が最後に残ってくる。近隣であったり、家族や友人であったり誰かと繋がっていることが必要で、それが何かの理由で断絶された状況になっている場合に、老人福祉委員や外国人福祉委員がそれを受け止めてあげることで、少しでも幸せを感じるようになるのではないかと期待すると述べられました。

当日は、京都市長寿福祉課、地域福祉課、南区役所福祉部、南区社会福祉協議会からも参加があり、参加者からも熱心な討論がありました。